

前田家本「寢覚」脱字考

——「こよなく……かぎりあれば」について——

中西 健治

はじめに

昭和八年（一九三三）に原本さながらに複製刊行された尊経閣叢刊「前田本寢覚」の解説を担当された池田亀鑑氏は前田家本をかなり高く評価されているものの、若干抑制気味に捉える大野木克豊氏（「文学」昭和八年八月号・「黒川本夜半の寢覚―寢覚に関するかくれたる研究の紹介―」所収）や藤田徳太郎・増淵恒吉両氏編著『校註夜半の寢覚』所収の増淵氏論文「夜の寢覚物語の研究」の説もあり、さらには関根慶子・小松登美両氏共著『寢覚物語全釈』では次のように記す。

この二本（竹柏園本・前田家本Ⅱ中西ニヨル）の善本の順位を必らずしもきちんと計量し得るかどうか、今のところ決し難い。前田家本は他本すべての脱落と思われる二十字前後を特有する箇所が四ありと同時に、前田家本の脱落と思われる十数字以上の箇所が七ある。（以下略）（十頁）

この検討の根拠とされた脱字の具体的な数字については鈴木先生の詳細な検討があり（『寢覚物語の基礎的研究』四十～四十七頁）、前田家本の十数字以上の脱落箇所は「七」ではなく八箇所であると指摘しておられる（これの初出は「平安文学研究」第二十八輯・昭和三七・六／「前田本寢覚の特質」。

もつともその直前に発行された「文学」昭和三十七年一月号で野口元大氏の論文「夜寢覚伝本考―新出の島原本を中心に―」においても八箇所という指摘はなされている。『平安末期物語研究史 寢覚編浜松編』二二六頁参照。鈴木先生は前田家本の特徴について述べられた章において次のように纏められる。

前田本は、以上のごとく他本の大きな脱落と見られる四箇所を特有することだけでも貴重な伝本であると言ふべきであるが、それ以外にも他本に於ける誤脱を訂正し得る箇所がきはめて多く、一々枚挙に遑がない。（『寢覚物語の基礎的研究』四六・四七頁）

このように述べ、島原本共々に前田家本善本説を支持されたのであった。ただ、前田家本にも欠点はある。「脱落と思われる十数字以上の箇所」が前田家本にあることは何と言つても大きな欠点であろう。これらについても鈴木先生は、関根氏の数字を訂正して八箇所としたうえで、そのほとんどが書写の際における不注意による脱字で、「善本であるべき前田本としては最も大きな欠点であると言ふことができる」（五三頁）と明確に述べておられるのである。

一 前田家本の脱字

前田家本の欠点をどのように説明するか。仮にほとんどの本が前田家本の本文と異なっているものの、前田家本でも何の違和感もなく読まれてきたかもしれないという事実を思いを致してみても如何かということについて考察してみよう。とりあえず、具体的な本文を掲げ、吟味してみようか。波線は私に付した。

8	うしろやすくめやすかるへき御なかつうけひき給て
9	ければ御心さしはこよなくたちまさりたれとかきりあれば
10	まつおほひめきみの御事を八月一日ととりていそき給ふ

(高村元継氏編『校本夜の寝覚』・三五頁)

父太政大臣の中君(女主人公)に対する愛情が大君よりも強いこと、世間体を考えてか中君よりも先に婚儀をせねばならぬことに言及している箇所である。関根氏は講談社学術文庫『寝覚(上)』で次のように注する。

○こよなく 以下「かぎりあれば」まで十七字、底本に脱しているの、島本により補った(中西注〓十八字か)。(四〇頁)

その後に婚約者として権中納言が紹介される「この頃」以下、二人の男子のことまでの説明的な記述について、「参考」として三項目をあげて以下のように説いている。

① 父君と後宮の情況説明が混然としているが、会話と地の文が混合する例は当時の文章に多い。

② 主人公紹介の記事が、中の君の紹介と中の君の重要な夢の叙述のあとで紹介されること——このことは男主人公が従で女主人公が主であることを明らかにしている。

③ 太政大臣の息子の紹介記事のあることがこの位置にあることが不思議である。関白左大臣の長男(男主人公)の紹介に合わせて太政大臣の子息の紹介を添えたか。

関根氏のご指摘は吟味するに値する課題を示しているように思われる。そもそも夜の寝覚の開幕は女主人公の夢に天人が現れ予言を告げるといふ極めて異様な事件が置かれ、そこに物語全体の骨組みが開示されることで読者に強烈な印象を与えるように仕組まれているのである。しかるにその後で、男主人公の人物像が設定されている。この人物像の配置と物語構想がもたらすメッセージは何か。男主人公はあくまでも従属的位置にあり、女君が中心的人物として前面に出る物語であろうことを示しているとは研究史の教えるところである。その果てに、女君は男君と共に人生を歩むことなどおおよそ困難なことであろうということを構想していたのではないかと憶測を重ねることが示されているからである。

二 十八字の意味

問題は、「こよなくたちまさりたれどかぎりあれば」という十八字が欠けている本文に従って読み解くとどうなるか、この欠字の意味から何か考えることがありはしまいかということである。どう考えても島原本などに比して前田家本に分が悪いことは明白である。島原本などの慎重な本文表現がこの場合は適当である。鈴木先生は前田家本の十八字の脱字は「意識的な省略とはどうしても考へ難い」(五一頁)と述べられ、「善本

であるべき前田本としては最も大きな欠点である」(五三頁)と結論付けられてもいる。いかにも前田家本の十八字の脱字は偶然にしてはあまりによくできていて、この十八字がなくなると前後の脈絡は通じていかにもきちんと理解できるのである。もつとも何ゆえに脱字が起きたのかもある程度の説明は可能である。しかしながら一方で、綿密な書写を心がけた前田家本の書写者がさほど不思議とも思わなかった箇所としても、この十八字があつたのである。

翻つて、島原本をはじめとする諸本の該当箇所からは、父太政大臣が二人の娘の内、妹である中君の方を「こよなくたちまさり」って愛していたことを述べ、かつ、「かぎりあれば」という世間的には姉の方を先に結婚させるのが当然とする世の見方を意識して、これに屈するかたちで大君の婚儀を進めたという内実を暴露することを示しているのである。一体全体、子供への愛情の濃淡はいくぶんかはあるとしても、「こよなくたちまさり」るほどのものかどうか、一般的に考えても、あるいは自身の体験を添えるとしても、なおはなはだ疑わしいと言わざるを得ない。

三 「こよなくたちまさり」

源氏物語における「たちまさる」の用例を検討してみよう。まずは、帚木卷の「雨夜の品定め」で気位の低い浮気な女について左馬頭が語る条。

「さて、又同じころ、まかり通ひし所は、人もたちまさり、心ばせまことにゆへありと見えぬべく、うち詠み、走り書き、搔い弾く爪をと、手つき口つき、みなたどくしからず見聞きわたり侍き。

(帚木卷・①五〇〥新大系による。以下、同じ)

次の例は、須磨に身を引く源氏のことを思い憔悴している紫上を慰める源氏の言葉である。左大臣方へ圧力をかけ、弘徽殿一統の狂暴な勢力が優ってくることを「立ちまさる」と言っている。

ひたおもむきにも狂をしき世にて、立ちまさることもありなん
など聞こえ知らせ給。日たくるまで大殿籠れり。

(須磨卷・②二二頁)

さる御仲らひに、人の思きこえたるもてなし有さまも、いにしへの御ひゞきはひよりも、ややたちまさり給へるおぼえからなむ、かたへはこよなういつくしかりける。

(匂宮卷・④二二二頁)

右の引用文は源氏の亡きあと、薫と匂宮が世間の評判を集めていくという巻の書き出しに当たる箇所である。これらの用例を通じて理解できるのは、比較する相手を圧倒する場合に「たちまさる」を用いていることであつた。また、源氏物語には「たちまさる方」という言い方がある。

かの人は、文をだにえやり給はず、たちまさる方のことし心にか、りて、ほど経るまゝに、わりなく恋しき面影に、

(少女卷・②三二四頁)

夕霧は恋する雲居雁のことしか念頭になく、内大臣邸に引き取られたことを残念に思い嘆き明かしている場面。夕霧の思いはひとえに幼馴染の雲居雁に注がれている。「たちまさる方」とは他の誰を替わりにすることのできない女性への思慕の募ることを「たちまさる」と捉えているのである。さらに「たちまさる人」という語句もある。讓位を決めた朱雀院が朧月夜の今後の身の振り方を心配して、何事においても優れている弟

の源氏のことを「たちまさる人」と言い悔む箇所を引用する。

たちまさる人、又御本意ありて見たまふとも、をろかならぬ心ざしはしもなずらはざらむ、と思ふさへこそ心ぐるしけれ」とてうち立き給ふ。

(濔標卷・②九七頁)

夜の寢覚の「たちまさる」の用例のうち一例(巻五)は建築物などの様子について述べているので、これを除外すると以下のようになる。

ほのかなる身なりなど、つぶつぶと丸に、うつくしうおぼえて、かばかりも近き気はひ、有様は、立ち離れ見し火影に、こよなうたちまさりて、言ひ知らずなつかしう、らうたうぞあるや。

(巻三・二七頁 新編全集。以下同じ。)

たちまさりて、もてないたてまつるべきことかは」とのみ、限りなく思ふに、

(巻三・三〇四頁)

つゆ分くるかたなくしみ返たれど、たち増り、やむごとなき人を並べて、様よきほどにもてなしたる

(巻五・五二七頁)

女主人公の容姿や彼女への男君の思い、女一宮の高貴な身分を指している場合である。とくに最初の例は「こよなう」があつて、今問題にしている箇所と類似している。帝の心を幻惑する寢覚上の容姿が他を圧倒する素晴らしさであることを表わしている。姦策を弄して寢覚上を蹂躪しかき口説く場面で、この上もないくらいにすばらしい寢覚上に惑わされている帝の姿をも含んでいるのである。その次の例は、闖入事件を知った男君の思いに触れる箇所である。女一宮以上に心を尽すのは、「たちま

さりて」女君だと改めて深く思い知るといふ用例である。最後の用例も、女一宮の身分は他を圧倒するほど勝っていると思う場面で用いられている。

このようにみると問題として先に引いた例は、父の中君に対する愛情の濃度が女君に対するそれよりも比較にならないくらい甚大である状態を言う意と解される。大野晋氏編『古典基礎語辞典』「たつ」(立つ)の項に「タツの連用形タチが動詞について接頭語として働くと、語気を強めてその動作・状態が目立つことを示し、はつきりと・・・する意を表す」ともある。姉よりも五つ年下であるということは、かなり離れている姉妹とも受け取れる。適齢期が来ている姉よりもまだその時期に達していない娘の方に父親の愛情がバランスを欠くほど注がれているとも受け取れ、なんとなく不自然な思いがするのである。上の娘と区別するような何かがあるのかとさえ疑ってしまうが、物語の中からはそんなことは読みとれない。母親が異なっている記述も見えない。ひたすら父の思いの範囲内で想像する以外になく、たんに父は妹を可愛がっていたという以外にない。新編全集の頭注は、

「心ざし」は愛情。父太政大臣の愛は常に中の君へ傾いている。中の君が女主人公であるゆえんである。(一一二頁)

と、中君が父の異常なほどの愛情を受けて育っていることを気付かせる注である。いかにも中君は幼い時から優れていたとは書かれていた。

中にも、中の君の十三ばかりにて、まだいといはけなかるべきほどにて、教へたてまつりたまふにも過ぎて、ただひとわたりに、限りなき音を弾きたまふ。「この世のみにてしたまふことにはあらざりけ

り」と、あはれにかなしく思ひきこえたまふ。(その後に、天人降下の事件と天人の予言の記事・二年目の記事) (一六頁)

三年目の八月十五夜、天人は結局、現れず、中君は空しく歌を詠んで琵琶を弾く。父はこの音色に耳を傾けながら、中君の今後の扱いに苦悩しているという記事が続く。

この君に、姫君はいま五つばかりが年上にもしたまへば、ことごとおとなびたまひにたるを、「いかにもてななきこえむ」と、おぼし乱ること限りなし。(二二頁)

しかし、しかしである。さきの新編全集の注は一応は納得はできるけれども、なお不完全と言わざるをえないのではないか。たしかに作者は女主人公に相応しく、何事においても優れている中君像を策定したのであるものの、父の側から見れば中君が大君を圧倒するように思わせる何の必然性も、文脈からは浮かび上がってこないからである。たんに結果として、父の愛情が中君に傾斜しているらしいということを入句として据えているのである。作者は中君への父の愛情を肥大化して描こうとしたのだろうか、はたまた、父は世間の一般的常識に逆らってまで妹である中君の方から先に縁づかせようとなぜ思ったのか、あるいは姉妹の優劣を思案することは物語読解以前のこととして触れずにおくべきことなのだろうか。実はそこに作者の大きな狙いが潜んでいるのではないかと、少し立ち止まって見たいのである。

四 繰り返す父の思い

前田家本で読んでみると「御ころぎしはまづおほひめ君の御事を、八月一日ととりていそぎ給ふ」とあつて、なるほど姉君から順番通りに結婚を決めたのだと読みとれる。ところがそのすぐ後にも追い打ちをかけるような記述がある。

「中の君こそ、さし並べたらむに、いますこしあはひよからめ」とおぼしながら、姉君はえ引き越したまはで、片つかたの御心には、「いかで、これに劣らぬさまにも、とりつづきて見てしがな」と、おぼし乱れたるに、(二二頁)

この箇所は先の前田家本の脱文に相当する内容をかなり具体的に説明しているものであると考えられるので、図式化して対照させると次のようになる。

A 御心ざしはこよなくたちまさりたれど、限りあれば、まず大姫君の御事を、八月一日と取りて、いそぎたまふ。

B 「中の君こそ、さし並べたらむに、いますこしあはひよからめ」とおぼしながら、姉君はえ引き越したまはで、片つかたの御心には、「いかで、これに劣らぬさまにも、とりつづきて見てしがな」と、おぼし乱れたるに、(二二頁)

A、Bは父の立場から娘である中君への思いを繰り返して述べているのであつて、各々の①②はほぼ同じ意味であろう。問題はBの③である。そもそもA②(B②)の「限りあれば」という父の洪面はどういうことな

のか。さらにはその解決法としてBの③のように、姉君から結婚させる案を一方で思いつく事で「おぼし乱れ」しているとはどういうことなのか。このような父の思考回路を丹念に繰り返して書いたのはどういう意図からなのか。父の困惑の淵源は何か、検討してみる課題はありそうである。

男主人公と女主人公の中君とは最初から人生のボタンが掛け違ったまま進むことが暗示されているのではあるまいか。読者にとつて釈然としないとも受け取れる父の思いはそのまま主題に関わっているのではなからうか。姉の大君の側から見れば、心の底から深く結ばれることのない夫婦の成立、我が妹との深い溝、そしてそのことに端を発する父の苦悩等々、それらすべての展開は織り込み済みのこととしてあつたのだ。そのためこそ解釈を超越する天人の予言を設ける必要があつたのではなからうか。悲しく深刻な事態はすでにここに芽生えているのである。前田家本は肝心な箇所を見過ごしたのであると考えられないだろうか。

五 「限りあれば」

②として示した「限りあれば」についても検討しておく。

源氏物語・桐壺巻で桐壺更衣が亡くなったとき、更衣の母は自分の娘をいかに葬つたらいいか、思案に暮れている。

限りあれば例のさほうにおさめたてまつるを、母北の方、「同じ煙にのぼりなん」と泣きこがれ給ひて、御送の女房の車に慕ひ乗り給ひて、……
(①・九頁)

この「限りあれば」についての先行論文があつた。山崎和子氏の「源氏物語「限りあれば、例の作法にをさめ奉る」の解釈について」(「高知女子

大國文」・18・昭和五七・三)である。詳しい考察の全容は措くとして、結論を以下のように述べている。

四六

①「限り」は「例」に関連する概念である。

②「限り」は、限度、限界を表わし、使われる場面によっては、具体的規定、禁忌たる掟、自分の力では及ぶことのできない運命的な「さだめ」を想起させる。

③「例」は、イ時間的連続の中で、同一性を持つ現在と過去のうち、過去にあたる部分を表わす。ロ特殊に対応する、一般の、普通の部分を表わす。問題文は後者にあたる。

④問題文に対する具体的規定を考えるならば、喪葬令に示された事(以下、具体的条文が示されている)が考えられ、特に「賤不得同貴」は大きな意味を持つていたと思う。位によつて葬送のあり方も違つていたと考えられ、三位と四位とでは、歴然とした差があり、死後「三位の位」を贈られたように、四位の更衣であつたことも意味深く思われる。

この後に結論の記述として、「限りあり」のかたちで本格的に使われたのは宇津保物語で、落窪物語には使用例はなく、その逆に「限りなく」だ、(「こと限りなし」が用いられるとし、「限りあり」は、宇津保物語には6例、源氏物語には82例、栄花物語には17例があると述べ、益田勝実氏がこの語句に「時代の人間性をめぐる問題のもっとも尖鋭な矛盾点を、過敏なまでに的確に感じとっていた」(『火山列島の思想』一七三頁)と指摘することをもって論を結んでいる。この益田氏、それを受けた山崎氏の論は夜の寢覚のAの検討の際に大いに参考になる。つまり、夜の寢覚の問題文の場合の「かぎりあり」は法律的な制約ではなく、いわば社会

的通念とでも言えるところの目に見えざる厳しい「掟」で、強いて言うならば山崎氏の言う②に相当するのではないかと思われるのである。現に関根『全釈』の訳には「ものには限度があるので」と訳している。「限度」というのはいささか不似合いのように思われるが、一面ではそういう制約の存在を解釈として用いてもよいのではないかと思うのである。社会的な見方、一般的な考え方の枠の中では、また、とりわけこの物語のような母親不在の設定下では、源氏物語の宇治の大君・中君を引き合いにすすまでもなく、姉がまず結婚をして、その後には妹が結婚をするというのがごく普通の成り行きと考えてよい。したがってこの場合も、父親としては日ごろから可愛がっている妹の中君をまずは結婚させた後に、次いで大君という運びを考えていたのだが、それは世間の常識に抵触すると思い、大君の結婚をとり決めたものであった。ただ、左大臣の長男である権中納言のを知って人を介してご内意を伺わせに向かわせ、左大臣方でも承諾したというのだが、この姉妹のいづれかということは問題にならなかったのか、本文には「皇女たちよりほかは、この人こそやんごとなかるべきよすがなれ。うしろやすく、目やすかるべき御仲」とのみあつて、「この人」が、読者にとっては、あるいは文脈の流れからみて中君のことと諒解はできるものの、「うしろやすく、目やすかるべき御仲」として左大臣側が承引する文言をそのまま読む限りにおいては姉か妹かは分からないし、むしろ姉をさしおいて妹との婚姻を何の抵抗もなく受け入れていたととるのは如何かと思われる。父は二人の娘の結婚相手を考えていた。あれこれ聞き合わせをした挙句に、今の左大臣の息子である権中納言が最もふさわしい人物として登場する。この男を見極めたうえで、父は人を介して権中納言方の意向も確認をして事を進めようと図る。ここで考えておかねばならないことは、父の膝下には娘が二人いるのである。太政大臣には四人の子供がいるのだが、男二人、

女二人それぞれの母は共になくなっている。左大臣方もそれは知っているはずで、世間の常識から言えば女二人をもつ太政大臣からの申し出とあらば、姉の婚儀であろうと、まずは受けとめるのではないか。あるいは太政大臣の娘ならどちらでもいいと思つたのかも知れない。ともかくも物語の表面上は「姉妹不詳」ということで事態が進んでいくことになつたことだけは確かである。左大臣方の承諾を踏まえて太政大臣の方が動き始めたのはあつた。「この人こそやむごとなかるべきよすがなれ。うしろやすく、目やすかるべき御仲」と承諾したときの「この人」が誰を指していたのか。すんなりと読むとすれば、「姉」のはずではある。その時に父の内面に起こつたさざ波のような不安は「姉」の存在であつて、「限りあれば」という社会的常識であつたのだ。父にとっては愛情の強さということよりも社会の通念の方が優先する。「まず大姫君の御事を、八月一日と取りて、いそぎたまふ」という文言は、父の愛情のあり方に従ふことなく、とりあえずは、姉の方の段取りを急ごうという、何ともしぶしぶの父の表情をあぶり出しているのではないか。「まず」という語は、再び『古典基礎語辞典』を引くと、

中古以降少し用法が広がつて、他のことをさしおいて、ある判断・意志を表すときにも、何はともあれの意で用いられるようになる。

とある。「他のことをさしおいて」とは、別に優先すべきことがあつたけれども、とりあえずは姉の婚儀を実行しようという意味である。つまり、「姉のこと」よりも「妹のこと」の方が父としては先にするべきことであつたのだが、世間の常識に配慮して「姉のこと」を優先させて仕組んだのである。しかも一気に「八月一日」と、日取りまで決定されたのであつた。「姉↓妹」の順、これが世間の常識であるが、これに反したこと

を父はふと考えた事も大いであつたのである。

六 「おぼし乱る」

「中の君こそ、さし並べたらむに、いますこしあはひよからめ」とおぼしながら、姉君はえ引き越したまはで、片つかたの御心には、「いかで、これに劣らぬさまにも、とりつづき見てしがな」と、おぼし乱れたるに、七月一日、いとおどろおどろしきものさとししたり。

(二二・二三頁)

大君と「左大臣殿の御太郎」との婚儀も決まった段階からの悩みは再び太政大臣側に移ることになった。中君にも姉大君の結婚相手同様の然るべき男を引き続いて模索せねばならないという課題を抱えることとなつたからである。父太政大臣は相当な人物を探さねばならない思いにかられて、「おぼし乱る」ことになる。「おぼし乱る」なる語は他の物語に比して源氏物語に極めて多く用いられていて、その個々の用例の二三の例についてみると、おのおの深刻な事態の渦中にある人物の心情を表わす場合に用いられていることがわかる。

まことに御心ち例のやうにもおはしまさぬは、いかなるにか、と人知れずおぼす事もありければ、心うくいかならむとのみおぼし乱る。

(若紫卷・①一七七頁)

右の用例は、藤壺の体調が不具合なのは源氏との密会のためであつて、これは人に絶対に秘すべきことである。藤壺が深刻に悩むという場面である。

はかなの契りやおぼし乱る、事、かたみに尽きせず。

(紅葉賀卷・①二四六頁)

これも源氏と藤壺との共有する秘密を「はかなの契りや」と捉え、源氏、藤壺双方が心砕く様相について「おぼし乱る」と述べているところである。

御息所は、物をおぼし乱る、事、年ごろよりも多く添ひにけり。

(葵卷・①二九九頁)

葵祭りの車の場所争いの際に受けた屈辱のために御息所の内に鬱屈した思いが募るといふ記述である。

これらの用例以外の「おぼし乱る」もほぼ同様な意味合いで用いられているものが多く、他の物語の用例にも源氏物語ほど多くは用いられていないものの、それぞれに深刻な思い乱れる心情を表わす場面に用いられている。夜の寢覚のこの用例以外の用例についても同様である。「八月一日」に婚儀という日限が明示されたことで父太政大臣の惑乱は募りつつも、事態は「七月一日」に「ものさとし」が起こるといふ展開になっている。このめまぐるしいほどの機械的な推移から予定されている九条での侵入事件まで、あたかも先を急ぐかのように足早に展開しているようである。

おわりに — 「姉妹」「兄弟」 —

次に検討しておかねばならないのは、右のAとBの間に次の一文があることについてである。

C 男君、太郎は左衛門督かけたる中納言、二郎は右の宰相中将にてぞものしたまふ。(二二頁)

この一文について人物や官職についての注は『校註』をはじめ諸注釈書が触れており、特段の注意も払われていないかのようには思え、『増訂寝覚物語全集』にも言及がなされているが、関根『全釈』の「参考」欄では、Cの一文が「なぜここににあるのか。関白左大臣の長男の紹介がなされたので、ここに太政大臣の子息の紹介も添えたのであろうか」(四二頁)と、唐突な人物紹介の記述とその前後の文脈との不整合性について疑義が出されていることは、少し注目しておく必要があるように思われる。いかにもこの一文は唐突で、大君・中君の腹違いの兄弟が物語で実質上活躍するのはもう少し後の方であるから、A・Bで大君の婚儀のことに触れ、それ以上に中君のことは大きな悩みであることを再度詳しく述べるのであるから、この間に何の脈絡もなく男二人の説明があることは何とも不自然な感を免れないのではあるまいか。中村本では序文の後に、「朱雀院の御はらからにておはしける人、姓を賜りて、ただ人になり給ひて、朝廷の御後見し給ひける、源氏の大臣とて太政大臣なる人おはしけるが、上二人持ち給ひたる中に、二位の大納言と申す人の御むすめの腹に、男君一人、女君一人おはしけり。帥の宮と申すが姫君の御腹に、男君一人、女君一人おはしけるに、その二人の上みな失せ給ひて後、」(『中世王朝物語全集・夜寝覚物語』・九頁)と、原文とは設定は異なるものの、四人の子供についての紹介がまずなされている。つまり中村本は男君についても冒頭近くに紹介が終わっているのに対し、原作では姉妹の身のうえ、とりわけ妹の夢に天人が出現し不思議な予言を告げることを中心に物語が

開始され、その予言の後に大君の婚儀のことが起こり、同時に中君の物忌、九条での事件が引き続いて起こるといふ、いわば姉妹の物語としてのみで語られていくのである。ともかくにもCは、前後につながらなるとすれば、書写の段階での書き入れ傍注が本文に組み込まれてしまったか、そうでなければあるいは何か意図的な配置であったかのいずれかであろう。前者の可能性も捨てきれないが、実証することは不可能である。仮に後者の見解をとるとするならば、その要因は問題としている「限りあれば」の語句に起因しているように思えてくる。父太政大臣は世の大方の見方に従って、自らの意図に反して中君をさし越えて大君の結婚をとり進めた。このふがいなさ、惑乱に父はとらえられている。姉妹の結婚に関する父親としての齟齬感、もう一方の男二人については極めて正常に行政機構に組み込まれ、生活しているのだということを明示しておく必要があった。そのことをふまえて唐突に記されているのがCの一文なのではないのか。傍注竄入説以外の納得できる考え方として試案を提示したい。

娘たちの結婚について頼るべき母親の欠落は、父親の「限りあれば」に深く関わり、そのことがこれから生起する問題の原点になっていると考えてみては如何かと思うのである。年齢的には「兄↓弟/姉↓妹」とあるのが穏当な社会的次第であるのに対して、この順を踏み外したことで物語が始まることになった。前田家本の見過ごした十八字はまことに大きな過失であったのではあるまいか。前田家本善本説の見解からは、この瑕疵はきわめて大きいことでもあったのである。

(本学文学部教授)